

伊勢国府跡 (長者屋敷遺跡第34次) 広瀬町

1月5日～3月4日 学術調査 213㎡

史跡として登録されている伊勢国府跡の学術調査を2ヶ所で行いました(図4)。いずれも遺跡の東方の範囲確認を目的としたものです。

北側の調査区では、遺構・遺物とも目立った成果はありませんでした。これまで知られている範囲より東側には広がらないことが確認されました。

南側の調査区では、南北方向の溝が1条確認され(写真11)、古代瓦も出土しています。この溝は北側で確認されていた溝の延長と考えられ、これまで想定していた範囲よりも南側へ広がる可能性が出てきました。

今後も、今回見つかった溝の周辺部分を調査し、伊勢国府跡の全体像を明らかにしていきたいと考えています。

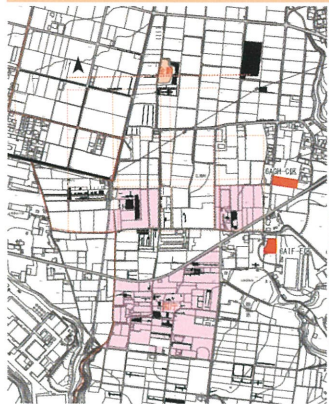


図4 調査区周辺の地図



写真11 溝の検出状況(北東から)

伊勢国府推定地 国府町

2月24日～2月26日 学術調査 6㎡

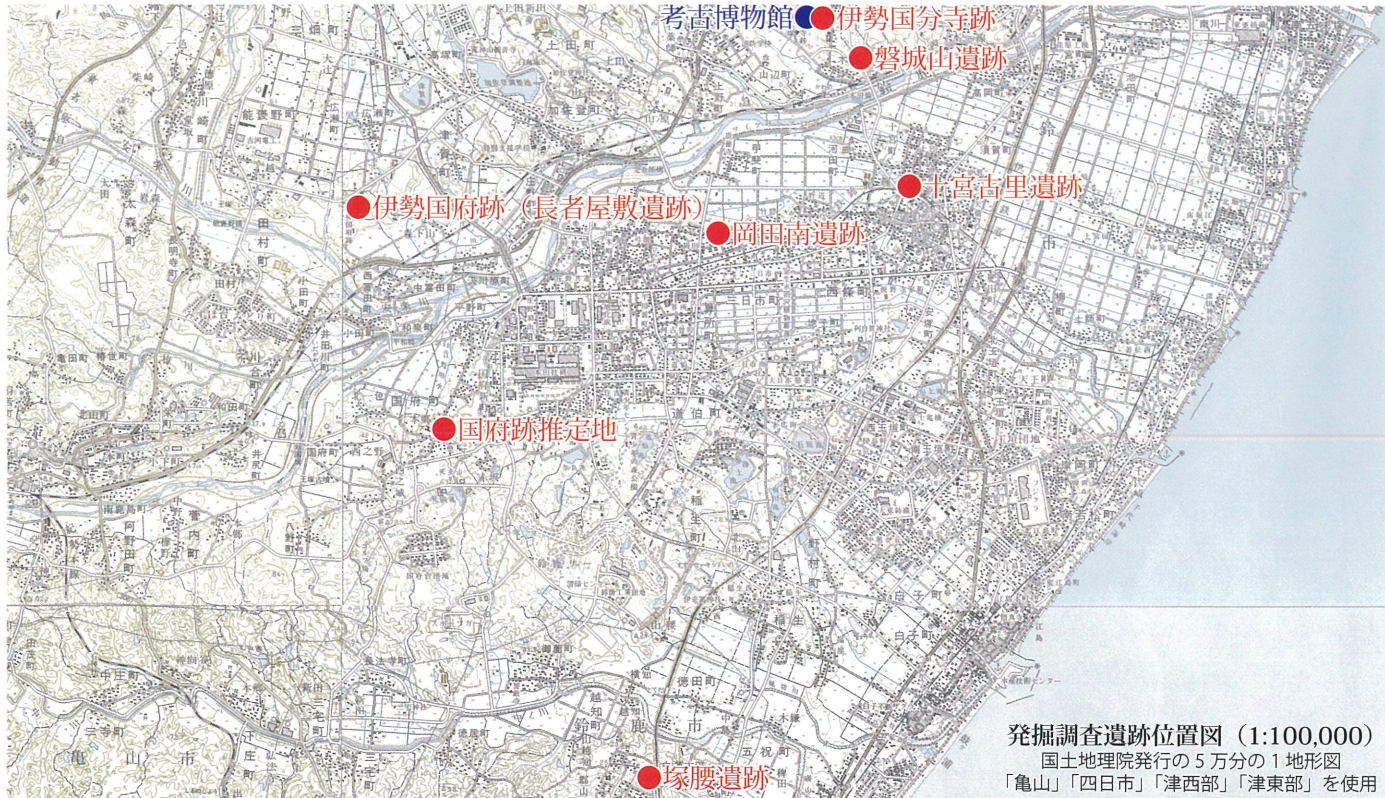
古くから、平安時代以降の国府があると推定地されている国府町にて、遺構と遺物の有無確認のための発掘調査を実施しました。対象地は、鈴鹿川右岸の支流、万丁田川の上流で、浅い谷状の地形でした。

幅1m、長さ3mの試掘坑を2ヶ所、1.4mの深さまで掘削しました。鎌倉時代の土師器皿や鍋が出土した下部からは、灰釉陶器が出土し古代の層序を確認しました(写真12)。ただし、この面で遺構は確認されず、出土遺物も極めて乏しいものでした。

今回の調査では、国府跡を示唆するような遺構や遺物は確認できませんでした。今後も、機会を得て国府町にあると考えられる、もう一つの国府跡の調査を続けていきます。



写真12 試掘坑1南壁土層断面(北から)



発掘調査遺跡位置図(1:100,000)
国土地理院発行の5万分の1地形図「亀山」「四日市」「津西部」「津東部」を使用

関連講演

発掘担当者による展示解説(考古博物館 特別展示室) 4月15日(土) 13時30分～
スライド説明会(考古博物館 講堂)

5月21日(日) 14時～ 「十宮古里遺跡第6次/磐城山第8-2・9次」

6月18日(日) 14時～ 「伊勢国分寺跡第40次/塚腰遺跡第3次/岡田南遺跡第3次/伊勢国府跡第34次」



鈴鹿市考古博物館
Suzuka Municipal Museum of Archaeology

〒513-0013 鈴鹿市国分町224番地
TEL059-374-1994 FAX059-374-0986
URL <http://www.edu.city.suzuka.mie.jp/museum/>
E-mail kokohakubutsukan@city.suzuka.lg.jp

速報展

発掘された鈴鹿2016

2017年3月11日(土)～6月18日(日)



写真1 三重県最大級の竪穴住居跡 SH09104 (北から)

磐城山遺跡 (第8-2・9次) 木田町

8-2次: 1月25日～3月25日, 9次: 4月11日～継続中
農地改良工事に伴う緊急調査 8-2次: 225㎡, 9次: 750㎡以上(継続中)

弥生時代後期後半(約1,800年前)を中心とした竪穴住居が約20棟と、それに付随する溝が多数確認されました。その他にも、古代(約1,300年前)と考えられる掘立柱建物10棟以上、中世(約600年前)の土壌墓3基、井戸1基(時期不詳)などが見つかりました。例年通り、著しく遺構が重複し、調査は難航しています。

今年の最大の成果は、三重県最大級の竪穴住居(写真1)が見つかったことです。平成23年の第4次調査の際に東側半分を確認していましたが、今回西側を確認し、規模が確定しました。弥生時代後期前半頃(約1,900年前)の建物で、東西約11.0m、南北約9.2mあります。床面積は100㎡を超える、超大型の住居です。ちょうど、磐城山遺跡が始まる頃の建物で、これ以後おびただしい数の竪穴住居が造営されることとなります。

また、「根巻き石」と呼ばれる、柱周りに石を詰めて補強する形態の掘立柱建物が2棟(写真2)確認されました。伊勢地方ではあまり類例のないものですが、古代まで遡るのではと睨んでいます。ちょうど竪穴住居と重なっていることから、その埋土と地山との境の深度に石が組まれていることから、土質の違いを避けた可能性があります。あるいは、重量のあるものを収納するために強化した可能性も考えられます。

昨年度のような同一場所での倉庫の建て替えは見られま

せんでしたが、竪穴住居から一括して土器が出土する(写真3)など一定の成果を得ました。

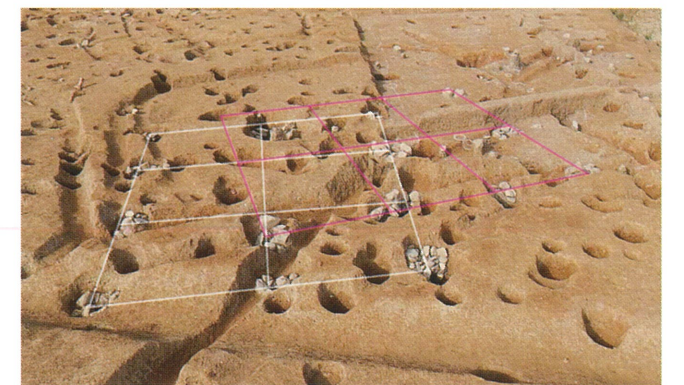


写真2 根巻き石を持つ掘立柱建物(倉庫)(南から)



写真3 竪穴住居 SH0960 の出土土器(北東から)

鈴鹿川右岸の低い段丘上の旧神戸中学校跡地にあります。平成27年度から継続して調査していますが、井戸が多数見つかっています(写真4)。2ヵ年で50基もの井戸を調査しましたが、ほとんどが中近世のものばかりでした。主に鎌倉時代(約800年前)と、少し時期があいて室町時代終わりから江戸時代(約500～300年前)にかけての井戸があるようです。調査地一帯の地盤が砂地ですので、古い川がひいた後の湧水地点などに多数の井戸が掘られたのでしょう。

井戸の中には大量の土器や陶磁器が投棄されていたので、近隣にはそれなりの規模の集落があったことが推測されます。注目されるのが、南へ1kmの所にそびえる神戸城です。神戸城は1550年頃に沢城(鈴鹿市飯野寺家町)から移されたといひ、それ以降、伊勢街道も神戸城下を通るように移設されます。ちょうど、十宮古里遺跡の井戸もこの時期と符合するので、神戸城下の開発と共に掘られたものだと考えています。

また、今回の調査区の南に隣接する第1次調査(平成5年)の際には、弥生時代から古墳時代(約1,700年前)にかけての水の祭祀跡とされる大溝が見つかっています。他にも、方形周溝墓が検出されていて、今回、それらの続きが見つかることが期待されました。残念ながら、上部の削平が著しいため、大溝の延長は確認できたものの(写真5)、第1次調査のような完形の土器が投棄されているような状況は確認できませんでした。



写真4 井戸 SE6145 の半裁状況 (西から)



写真5 溝 SD6001 の掘削風景 (北西から)

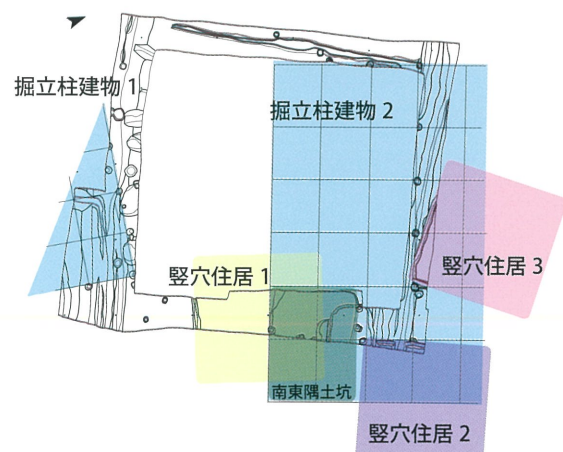


図1 遺構配置図 (S=1/300)

鈴鹿市南部の段丘上に位置します。第3次調査は、基礎工事によって掘削される部分のみを対象としましたので、12～13m前後の方形の調査区となっています(図1)。

主に竪穴住居3棟と、掘立柱建物2棟が見つかりました。掘立柱建物2は、南東隅に石が詰まった土坑(写真6)があることから、東西に6間あったようです。また、南北には3間以上あることが確認できましたが、調査区外へと続くため詳細は不明です。南東隅土坑から鎌倉時代(約800年前)の山茶碗や山皿、鉢、常滑焼きの甕等が出土していますので、この頃の建物と考えています。

また、掘立柱建物1は東西3間以上、南北2間以上としか分かりませんが、概ね鎌倉時代頃のものだと推測しています。ただ、掘立柱建物2と軸方向が異なるので、同時には存在していなかったのでしょう。

竪穴住居は、深さが10cmと浅く、削平が著しいため、詳細不明な点が多いです。少ないながらも、古墳時代の終わり頃から飛鳥時代(約1,400年前)にかけての土師器や須恵器があることから、この時期の建物である可能性が考えられます。



この時期の建物である可能性が考えられます。

なお、カクラン層から鎌倉時代の滑石製の石鍋が出土しました(写真7)。滑石製石鍋は、長崎市で集中して生産されていたことが知られており、長崎から流通してきたと考えられます。



写真7 石鍋

鈴鹿川右岸の低位段丘の北端部に位置します。第2次調査にて、弥生時代の方形周溝墓らしき溝状の遺構が多数確認されていましたが、幅2m程度の調査区のため、不明な点が多く残されていました。今回の調査区は、その西側に位置し、これらの続きが確認されたことになります。

今回見つかった方形周溝墓は2基ですが(図2・写真9)、いずれも弥生時代中期後半(約2,100年前)頃に造られたようです。第2・3次の調査成果から、弥生時代中期後半の方形周溝墓が、周溝を接するようになり、東西に帯状に広がっている様子が復元できます。この辺り一帯は墓域として利用されていたようです。

また、縄文時代中期末(約4,500年前)の土器敷き土坑1基も発見しました。検出当初、竪穴住居の中央によくある炉だろうと想定して掘削したのですが、それを示す焼土や炭化物が確認できませんでした。実際には、穴の中に土器が敷かれたような状況で出土したにとどまりましたので(写真8)、竪穴住居とは考え難く、このような表現にしています。

この他にも、縄文時代晩期の土器が入った柱穴も見つかっており、市内でも数少ない縄文時代の遺構や遺物が確認される遺跡といえます。

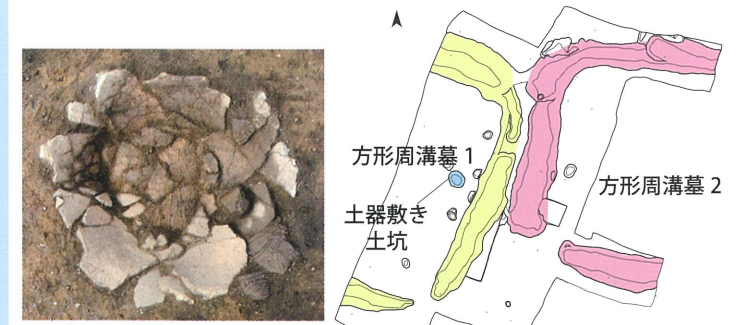


写真8 縄文土器の出土状況 (南から)

図2 遺構配置図 (S=1/300)



写真9 方形周溝墓の検出状況 (南東から)

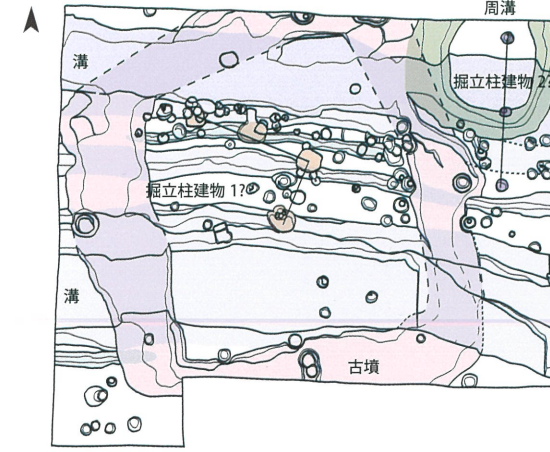


図3 遺構配置図 (S=1/200)

鈴鹿川左岸の段丘上、当館のすぐ東側に隣接します。これまで伊勢国分寺跡として、40回もの調査を実施している地域です。

新たに古墳1基と、塚らしき周溝1条、掘立柱建物の可能性のある柱穴2ヶ所が確認された他、第7次調査からの続きと推定される平行する2条の溝(道路側溝か)などが見つかりました(図3)。

古墳はいずれよりも古い遺構で、一辺約9mの方墳です(写真10)。墳丘部は残っていませんでしたが、幅2mの周溝が検出されました。明確な時代は分かりませんが、周辺部の調査成果などから古墳時代末期(約1,400年前)の築造だと推定できます。

その後、この古墳を壊すようにして掘立柱建物1?が作られ、さらに、道路側溝が掘られています。掘立柱建物の時期は不明ですが、道路側溝の開削が7世紀後半～8世紀初頭(約1,300年前)まで遡るようで、古墳→掘立柱建物→道路と、およそ100年の間にめまぐるしく移り変わっていくことが判明しました。

他の調査区などの成果から、当館の周辺には、古墳時代の終わり頃、小さな古墳が群集して築かれていました。ところが、奈良時代初頭頃に、古代河曲郡の政庁や正倉といった重要な施設群が、多数の古墳を壊して一斉に作られます。さらに、741(天平13)年の聖武天皇の国分寺建立の詔が発せられると、今後は国分寺が建てられることになります。河曲郡関係の建物は、国分寺造営に伴って移動させられているようで、短期間で姿を消します。わざわざ建築した河曲郡関係の施設は移動させられているようで、国分寺造営にかかる思いの強さを感じることができます。



写真10 調査区全景 (南西から)